

Sさんの地域移行への取り組みについて

愛名やまゆり園
尾崎 詩織 柿崎 亮太
石井 綾 小山 あゆみ

1.はじめに

愛名やまゆり園では、ここ数年のグループホーム新規入居者は在宅から移行した方ばかりで、施設入所からの入居は 7 年ぶりである。7 年前は法律も違い制度も違った。当時を知る職員もほとんど入れ替わっている。そんな状況で地域移行に取り組んだセッションごとの報告を行う。

A さんのプロフィールを紹介する。

- ・46 歳 女性 ・4 人姉妹の 3 女
- ・知的障害 療育手帳:A1
障害支援区分:区分 5

<成育歴>

S47.12 誕生。

S48.2 実母の養育能力不足により栄養失調となり、B 病院に緊急入院。退院後、C 乳児院に措置入所。

S51.5 C 乳児院退所後、叔父、叔母夫婦の元で育つ。

S54.4 D 養護学校小学部入学
(週 1 回、訪問指導)

S57.4 F 小学校特殊学級(現特別支援学級)転校

S60.3 F 小学校卒業

S60.4 G 中学校特殊学級入学

S63.3 G 中学校卒業

S63.4 H 養護学校高等部入学

H3.3 H 養護学校高等部卒業

H3.4 公立の通所事業所(現生活介護事業所)
利用開始

H13.9 叔父の死去

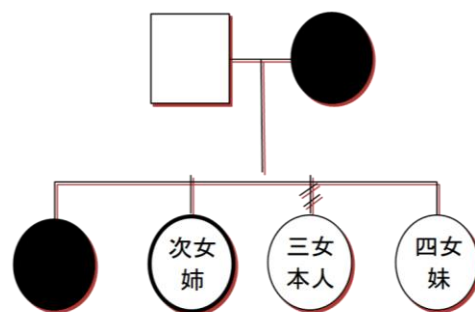
H14.10 叔母の入院により叔母の妹宅で生活をしながら通所先に通う。

H15.10 愛名やまゆり園 入所

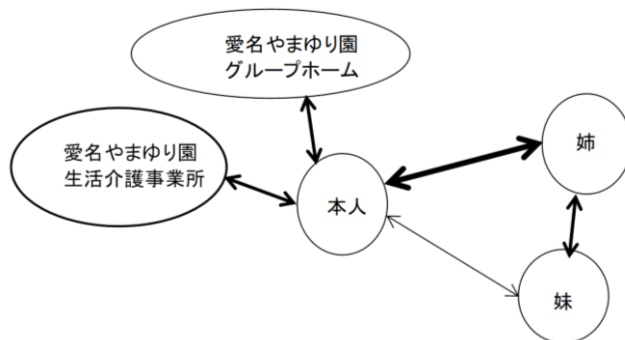
A さんは両親ともに知的障害の家庭に生まれた。母の養育能力はないに等しく、A さんが生後 2 か

月少して命にかかわる状態で退院後、いったん乳児院に預けられたが、叔母夫婦の元で過ごす事となった。しかし、叔母夫婦も知的障害があり、生活環境は良くなかった。叔母夫婦の元から公立の通所施設へ通ったが、叔父の死、叔母のガンの発覚と続き、叔母の妹宅へ預けられた。叔母の闘病が長くなることから、その妹宅での生活も難しくなり、当園への入所となった。

下記は A さんの家族構成。A さんの妹は知的障害があり、愛名やまゆり園の短期利用を使う事があり、短期利用中に A さんと一緒に出かける事もある。



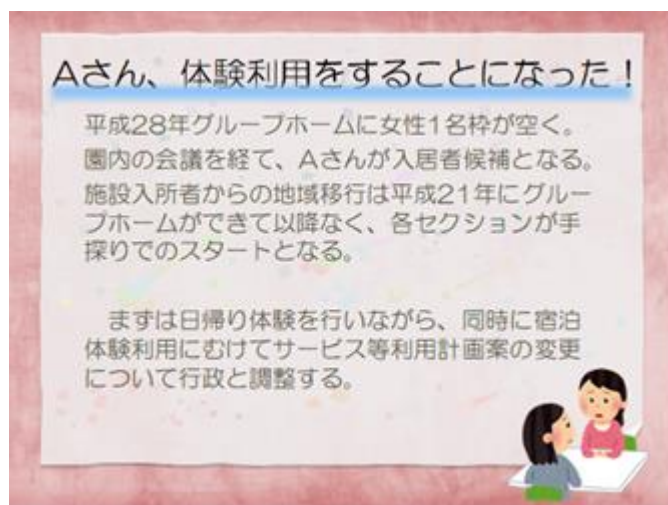
A さんの社会関係図は以下のとおりである。



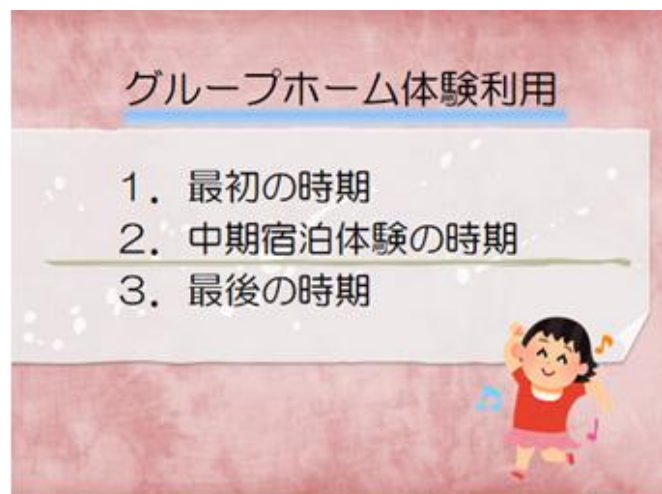
平成28年当園のグループホームに、女性 1 名

平成 30 年度 体験交流セミナー③

の空きができた。何名かの候補の 1 人として、A さんがあがった。他の入居者との関係を考え、園内の会議を経て A さんが第 1 候補となり、施設入所支援をしながら、グループホームの体験利用を行う事となった。実施にあたり、送り出す生活寮の職員も、受け入れるグループホームの職員も初めての事であった。まずは日帰り体験を行い、その間に宿泊の体験利用ができるよう、サービス等利用計画案を見直し、新たに共同生活援助の体験の支給量を追加した。

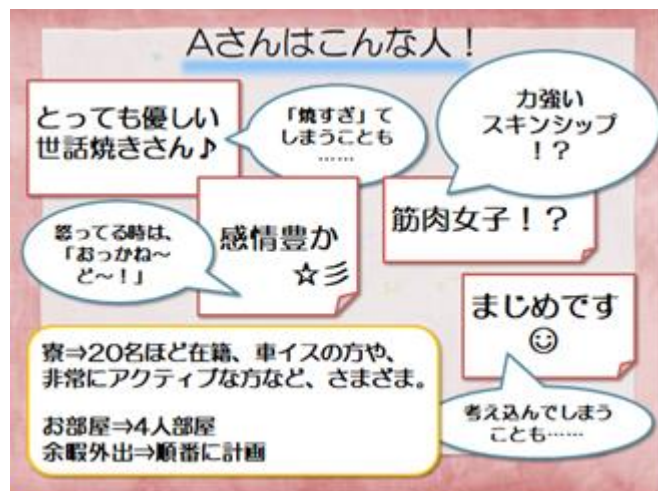


しかし唯一費用面で、施設入所と共同生活援助の居住系サービスの二重支給はできないため、体験利用の費用は全額自己負担となった。



2. 最初の時期について

Aさんは、平成 29 年 4 月末から約 9 か月間をかけて、GH の体験利用を行った。



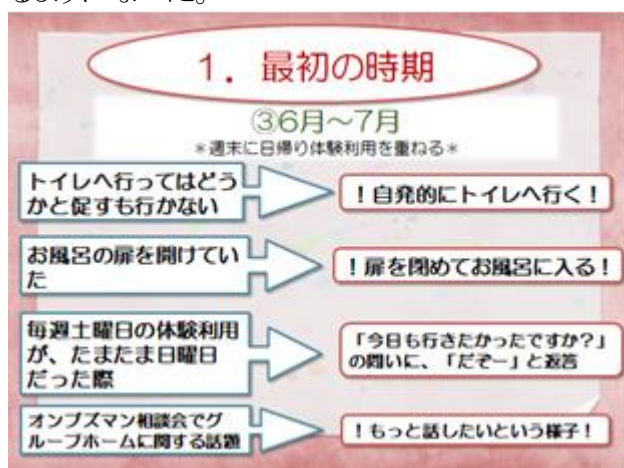
Aさんの性格を踏まえ、本格的な体験利用の前に、寮職員付き添いのもと GH へ遊びに行く「見学」を設定した。その後、寮職員と一緒に短時間利用をし、一人での短時間利用をした。当初は緊張した面持ちであったが、知り合いの利用者さんがいた事もあり、すぐに打ち解けた様子であった。



5 月、午前から夕方までの、単独での日帰り体験利用を行った。世話人と塗り絵をしたり、折り紙をしたりと、マンツーマンのコミュニケーションを楽しんだ。帰り際には名残惜しそうな表情で、「また来てくださいね」と声を掛けると、笑顔で手を振っていた。その後、6 月と 7 月は週末に日帰り体験を行った。



回を重ねるごとに環境に慣れ、利用者さんや世話人との距離も縮まり、緊張感や戸惑いが無くなる様子であった。具体的には、お風呂の扉を閉めるようになる等、気持ちの変化が行動として、表れるようになった。



GH の利用に関し、とても楽しい、もっと挑戦したいという気持ちが強い様子であった。体験利用の様子をご家族へ説明し「本人にとって住みやすい環境で暮らして欲しいと思っている」との了承を頂き、宿泊体験利用を行う運びとなった。



3. 中期宿泊体験の時期について

8月から11月まで、中期宿泊体験を重ねた。8月、一泊体験に挑戦した。排泄や入浴は非常にスムーズだったが、環境が違う事もあって、なかなか寝付けず睡眠時間は3時間ほどであった。帰寮後、本人に宿泊について尋ねると、「いった～！」と明朗に答えてくれた。緊張感や疲労感があったと想像できるが、それを上回るような満足感も感じている様であった。



9月は2泊3日、そして10月は3泊4日の宿泊体験を隔週で行った。本人は非常に前向きで、準備も積極的に行い、宿泊を楽しみにしている様子であった。寮職員が「嬉しい気持ちと、ドキドキの気持ちと、どっちですか？」と本人に聞くと、バンザイをしながら「わーい」と返事をしてくれた。「たのしみ！」という気持ちが、不安な気持ちよりも勝っているようであった。9月10月の宿泊体験中、過ごしの場である生活介護事業所で、行動が止

まってしまうことや、昼食を食べないなど、宿泊そのものではない部分の課題が出てきた。

11 月、ぐっと期間を伸ばし、1 週間の宿泊体験を隔週で設定した。GH での宿泊体験自体はこれまで以上にスムーズに進み、利用者さんや世話人との間でトラブルはなく、コミュニケーションも良好な様子であった。生活介護事業所では、9 月 10 月同様、行動が止まってしまうこともあった。

本人にとって生活介護事業所は、もともと活動班に所属していたが、決して「長い時間過ごす場所」ではなかったのも、「知っているようで知らない未体験ゾーン」だったのかもしれない。しかし、徐々に慣れのんびりと過ごす姿も見られるようになり、11 月末になると、以前よりも食事を食べるようになった・全体的に流れがわかってきたようだとの報告が多くなった。

平成 29 年 11 月、本人に、GH への移行について、提案をした。生活に慣れて来たか、夜一人で寝る事は怖くないかなど、さまざまな質問に対して、否定的な返事はなかった。「寮ではなく、GH で暮らす事についてどう思いますか？」と聞くと、にっこり笑って、うんうんと頷いて応えてくれた。

4. 長期宿泊体験の時期について



12 月、約 10 日間の連続宿泊体験を行った。生活介護事業所において、緊張がほぐれてきたこともあり、他の利用者さんとの間でトラブルに至る事があった。GH では、体験利用日以外にも「お誕

生日会」や「忘年会」、「コンサートを見に行く余暇外出」など、イベントに参加した。風邪がはやり、遊びに行く予定がキャンセルとなると、とても残念そうにし、不機嫌な様子で無言になってしまう事もあった。また、ご家族に本人の生活を見学してもらうため、GH で面会を実施した。ご家族は、「本人が笑顔で過ごしているのを見て、GH での生活があっているんだなあと思った」と感慨深げにおっしゃっていた。体験利用終了時、連絡ノートに、「今日で体験利用が終わってしまい、寮に戻りたくない様子でした。」と、世話人からの報告があった。すねたような表情を寮職員にみせることがあり、「もっと GH にお泊りしたかったですか？」と声を掛けると、「だぞお！」と言いながら抱きつくことがあった。長期間だったが楽しく利用できたか聞くと、すねた表情からパッと明るくなり、満面の笑みで OK サインを見せてくれた。また泊まりに行きたいか確認すると、「オッケー！」と応えてくれた。A さんの中で、GH での生活が充実していること、比重が大きい事が理解できた。そこで年明けに、前回よりも踏み込んだ形で、生活移行に関する A さんの意思を確認した。

5. 生活移行に関する意思の確認について

A さんの意思の表現方法は、ジェスチャーや、ごく短い単語が主だった。けれど、自分の気持ちをはっきりと、どちらであるか選択する事は可能である。その為、A さんにとって、わかりやすく選択できる様、馴染みのある、「折紙」を使って確認をした。GH を茶色の折紙、寮をピンクの折紙と設定し、どちらがどちらであるかの確認をした。そのうえで、「GH での生活と、寮の生活、どちらの方が好きか」聞くと、GH の茶色の折紙を選んだ。色を入れ替えて、GH を左手ピンク色の折紙、寮を右手茶色の折紙にして再度選んでもらうと、やはり GH を選んだ。

今度は全く別の色、黄緑色と黒で同様の事を行ったが、答えは同じく GH であった。GH の紙を職員の左手側、寮の紙を右手側で持って掲示していたが、それをも逆にして、左手を寮、右手を GH としたが、答えは「GH」であった。



GH での生活が好きかなどを聞くと、笑顔で「うん」と頷かれた。寮とお別れする事に関し、「不安だけどやってみようかなという感じですか?」と聞くと、手を横に振った。「ドキドキしませんか?」と聞くと、うんうんと頷き、最後に「グーサイン」で意思表示した。A さんの気持ちが確認された事から、意思決定支援会議を実施した。

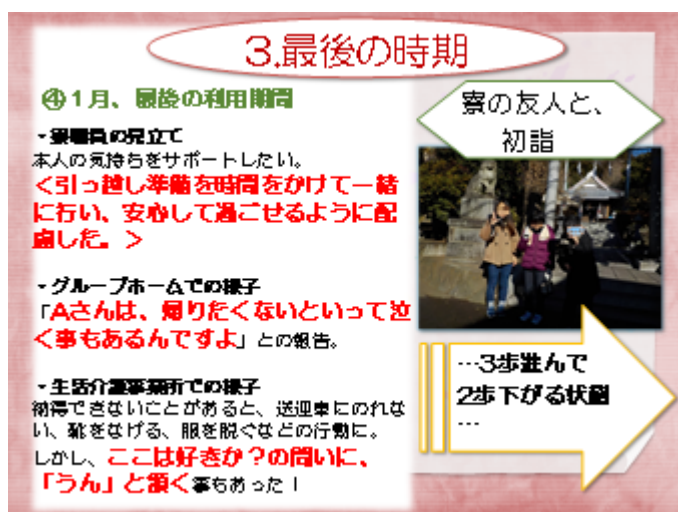
6. 意思決定支援会議について

A さんのヒアリングシートを作成し、体験利用をした上での本人の気持ちを確認した。結果、GH への本入居が確認され、平成 30 年 2 月 1 日付でグループホームへ移行となった。この時、日中活動をどうするのかも検討したが、グループホームの生活にしっかり慣れるまでは、今までと同様、愛名やまゆり園の生活介護事業を利用することとなった。

7. 新生活へ向けて

1 月 18 日～29 日に行った、最後の長期体験利用時は、これまで寮内では見た事のない A さん像が表出した。生活介護事業所で、「本人の行いたいことが、行いたいタイミングでできない」ことや、他の利用者さんからの声掛け、雰囲気を感じて、気持ちの浮き沈みが出るようになった。写真や絵カードを使用するなどの方法も試み、ぱっちりほまることもあれば、刺激により逆戻りすることもあり、

「3 歩進んで 2 歩下がる」ような状態であった。それまでは寮職員が本人の様子を見に行く事もあったが、生活介護事業所職員と話し合い、あえて寮職員は関わらず、本人と生活介護事業所の中での関係構築を目指す事とした。さて、いよいよ明日から GH で生活する事となる 1 月 31 日、「2 日間世話人にあっていないけれど、寂しくなってきましたか? 会いたいですか?」と聞くと、すぐに「うん!」と答えた。「明日、会えますね」と伝えると、にっこり笑ってくれた。本人にとって GH が拠り所となっていることが、強く伝わってきた。



8. 愛名やまゆり園グループホーム紹介

愛名やまゆり園はグループホームを全部で 4 棟運営している。

入居者は男性 15 名・女性 8 名の合計 23 名。

平均年齢は男性 52.3 歳・女性 54.2 歳。

平均障害支援区分は 4.7。

平成 15 年 10 月に、あいなホームココが開設。

あいなホームココの定員は 5 名 + 体験枠 1 名。

あいなホームココが唯一、男女混合のグループホームとなっている。

平成 21 年 5 月に、オアシス 1・オアシス 2 が開設した。

オアシス 1 の定員は男性 6 名。

オアシス 2 の定員は女性 6 名。

平成 22 年 4 月に、オアシス 3 が開設した。

オアシス 3 の定員は男性 7 名。

平成 30 年度 体験交流セミナー③

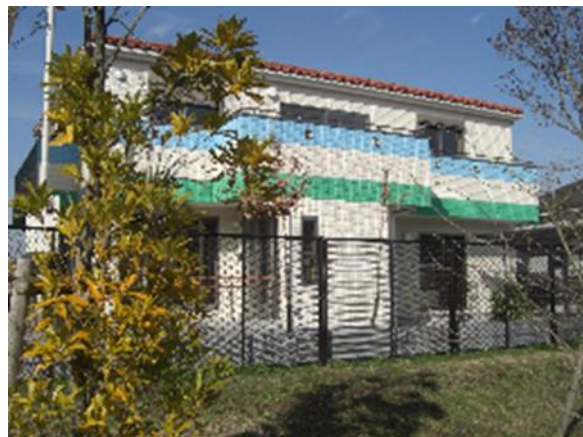
あいなホーム CoCo



オアシス1・2



オアシス3



オアシス2 入居者の平均年齢は 54.2 歳、平均障害支援区分は 4.5。本来、体験利用はあいなホーム CoCo を利用することになっているが、オアシス2 の 1 部屋が空いていた事と、Aさんの性格等を考慮した上で、オアシス2 での体験を利用する事となった。オアシス2 には、寮からホームに移行した方が2名いるため、顔見知りの方がいたことでAさんにとってはホーム体験がスムーズに行える

安心材料の一つでもあった。

オアシス2 リビング



オアシス2 居室



9. グループホームへの移行

次に、Aさんのグループホームでの様子を報告する。

体験利用を丁寧に重ねていったので、2月1日のグループホーム移行時は特に問題なく、体験利用時と同じような感覚でオアシス2 に入って行き、無事に移行出来た。移行して直ぐに、Aさんの歓迎会を行った。グループホームの皆さんに「いらっしやい。これから宜しくね。」等の歓迎の声を掛けられAさんは、とても嬉しそうであった。

体験利用時から自身のことは自身で行い、出来ないところは世話人や夜間支援者が分かるまで何度も声を掛けた。Aさん自身もグループホームの皆さんの動きを見て、次は何をやるのかなと観察をしていったので、移行してから特別に何かが変わるといった不安はなかったように見受けら

れた。。体験を積み重ねていったお陰で、混乱なくグループホームに移行できた様子であった。

Aさんの歓迎会の様子



洗濯物を畳む Aさん



グループホームでの生活が進むに連れて、Aさ

ん自身が帰る場所は「愛名やまゆり園の寮」ではないという不安にかられたのか、今まで我慢していた事や不満、心細さからAさん自身も戸惑いをどう表現していいのか分からない様子が伺えた。

生活介護事業所の迎えが来る時間帯や、戻ってくる時間帯に、行動停滞が多く見られるようになった。時には、早番の世話人の退勤時間に一緒に愛名やまゆり園まで歩き、遅れて生活介護事業所に行く事も見られた。

生活介護事業所から戻ってくると、ホーム玄関先で身の回りの物を投げ、壁に頭突きをすることが見られた。体験利用時には見られなかったことが沢山出てきて、世話人や夜間支援者もどのように支援すればいいのか悩む事が多くなっていった。

そこで、世話人や夜間支援者と職員との情報を共有するために、支援する側がAさんのどのような事で困っているのか、また悩んでいるのか意見を聞いた。また、Aさんの良いところも聞かせてもらった。

困っている点として

- ・声を掛けると動きが止まる。
- ・朝、送迎車に乗れない。乗るのに時間が掛かる。
- ・着ている物を脱いで下着姿でリビングを歩き回る。
- ・グループホームの皆さんとのかかわりの中で大きな声をだす。
- ・ドアや壁に頭をぶつける。
- ・外に飛び出そうとする時がある。

こんなところが良いよ…では

- ・テーブル拭きが、とても丁寧で上手。
- ・床の拭き掃除を一生懸命行っている。汚れたシートを見て「きったねー」と言い満足しているところ。
- ・クシャミや咳をしている方がいるとティッシュを持って来てくれる優しいところ。
- ・自身の用意が出来る。
- ・悪い事をした時は分かっているようで、後で行動でゴメンナサイを伝える。
(抱きついてきたり、肩をもんできたりなどスキンシップを求めてくる。)

上記のような意見が出た。支援者として困っている事が多いのかと思ったが、Aさんの良いところもたくさんあったので、グループホームでは、Aさんの良いところに注目していく支援を心掛けた。

その後、生活介護事業所と情報を共有し交換していった結果、表情が強張った時や動きが止まった時などは、必要以上の声掛けをすると更に混乱を招いてしまうので、必要以上に声掛けをしない事で支援を統一していく事となった。

統一した支援をきっかけに、困った点が軽減された。また、支援する側もAさんとの関係が築けてきたことも軽減の一つと考えられる。

その後も、世話人や夜間支援者が困ったことが出てきた時は職員との情報を共有していき、その都度、話し合った。



現在のAさんは、グループホームでの生活が安定し、自身も安心した生活が送れているためか、笑顔がたくさん見られている。

グループホームの皆さんと余暇は折り紙をしたり、絵を描いたりして過ごしている。

皆さんのお喋りに耳を傾け良く笑っている姿がみられている。隣のグループホームの皆さんや世話人さんに絵をプレゼントする事も見られる。

時には、来訪者にも絵をプレゼントしている。

最初は見様見真似で掃除機掛け、クイックルワイパーで床を拭くことやテーブル拭きなどのお手伝いをしていたが、今では積極的にお手伝いをしている。

休日の昼食の買い物は近隣のコンビニやパン屋に行く事が多いが、隣のグループホームの利用者と一緒に行き物に行く日もある。

大好物の助六やミートソーススパゲティを買う姿が多く見られている。

ミートソーススパゲティを食べ終わると、口のまわりにミートソースがたっぷり付いていて、「お化けだぞ」とお化けの仕草をする姿で、皆さんを笑わせてくれる事もある。

近隣の美容室、地域交流イベント・自治会のお祭り・美化清掃などにも積極的に参加して地域の方との交流も少しずつ築けてきている。

10. 生活介護事業所の紹介

Aさんが地域生活を送っていく中で、本人の混乱を最小限にしていく事や顔見知りの利用者や職員がいる事で安心できるように愛名やまゆり園内の生活介護事業所に通う事になった。この生活介護事業所には、1日に約30名弱の方が在宅から通われ、日中活動の際は、入所生活を送られている利用者の方も参加されている。日中活動の内容としては、午前には園外歩行や体育館での音楽レクリエーションなどの活動を行なっている。午後は、個別の作業や創作・受注作業と入浴支援を行なっている。

【日中活動の紹介】

Aさんが参加されている午前午後の活動の紹介。午前の活動は、約10名前後の利用者と3km程の道のりを1時間ほどかけて歩行。午後の活動は、ウッドビースでストラップやブレスレットを作成する創作活動を行っている。



今回、Aさんが地域生活に移っていく中で、「生活介護事業所での過ごし方」の部分が1番難しかったように感じる。まだ慣れていない事や分からない事が多く、Aさん本人も混乱や不安があったと思うが、職員側も同じように『動いてくれない。どうしたらいいんだろう・・・』や「今まで笑っていたのに、急に表情がこわばった。どこがダメだった・・・」等の不安や焦りがあり、毎日のように話し合いを行なった。また、「本当にこの事業所に通いたいのかな？」という話が出たこともある。

11. ケア会議の実施

新生活スタートして2ヶ月が経過した4月に、『困っている事を整理し、どのように対応していくかを検討する』という目的でケア会議を実施した。このケア会議では、移行に向けての体験利用中から本人の混乱している姿が1番多く見られた生活介護事業所に通う中で、困っている事や難しいなど感じている事の話し合いを行った。

まず、Aさんの支援をしている職員が困っている部分のピックアップを行ない、『次に動き出せず、行動が止まる』『服や靴を脱いで、放り投げる』『他利用者とのトラブル』の3つが、『いま困っているベスト3』という話になった。その中でも1番の困り事だった『次に動き出せず、行動が止まる』の内容としては、「送迎車に乗れない・活動時に声をかけると動き出せなくなる」という事が多く見られた。今まで約15年近くの入所生活で築き上げてきた生活をガラッと変えることになり、Aさん本人が混乱している様子が見て取れた為、まずは『目的をハッキリして、Aさんがスムーズに動けるように支援をしていこう』となった。

12. Aさんへの取り組み

最初の取り組みとして、グループホームと生活介護事業所が共通して困っていた、『事業所の送迎車に乗れない事が続いている』という部分に注目した。事業所までの『行く』事や事業所から『帰る』事が上手くスムーズに行くと、その後の過ごし

の部分が落ち着くのではないかと見立てをした。まず、『行き』の送迎については、順番を朝1番に迎えに行く事をした。以前は、他のグループホームの方と同じ時間に迎えを行っていたが、本人の動き出せるタイミングと合わず、乗車できない事が多く見られた。次に『帰り』の送迎については、午後の活動後に過ごし場に戻らず、活動していた部屋から送迎車に直接乗り込んでいくことを行った。過ごし場に戻ることによって、早く帰宅したい利用者のバタバタした感じや、周囲の雰囲気を受けて、動き出せなくなる事や、園内を彷徨っている事が見られていた。この2つの取り組みをすることによって、送迎車に乗れずに世話人さんと歩いて登園することや、園内を彷徨って降園できないと言うことは、ほぼ見られなくなった。しかし、いつもと送迎車が違う事や上着の袖が上手に通らないなどのイレギュラーな事が少しでもあると、いまだに乗れない事も見られている。

13. 送迎の様子

この2枚の写真は、最近の『行き』の部分の写真です。先程紹介した取り組みに加えて、インターホンを押して呼び出す事をするようになり、更にスムーズに乗り込むことが出来るようになった。





上側は、送迎を行なう職員が本人の持参しているバッグや上着などを活動室まで持って行くと、連絡ノートなどを自ら片付けて帰る準備をしています。本人の準備が整うと下の写真のように職員と手を繋ぎ、そのまま送迎車に乗り込み、降園。

14. 日中活動の様子

左側が午前の活動、右側が午後の活動の様子となります。左上の写真は、休憩時に参加利用者全員分の飲み物の準備をしてくれている様子です。左下の写真は、歩行後に連絡ノートに貼る「頑張ったシール」の写真です。右側の2枚の写真は、ウッドビースをヒモに通して、ブレスレットやストラップを作成している様子です。



15. 生活介護事業所での様子

次の写真は、昼食の様子である。



食事を食べられないこともあったが、今では元気にペロッと完食されていることが多く見られている。右側の写真は、事業所の出入口が開く音があるとパッと振り返っている瞬間のAさんの様子。人が入ってくる、「おはよう」とハイタッチで挨拶をする。

16. まとめとして

Aさんがグループホームでの新生活を始めてから10ヶ月が経過した。今回の発表で今までの取り組みについて振り返ることが出来る、とても良い機会となった。また、『振り返り』の重要さにも再度気付かされた。この発表をキッカケに『振り返り』を更に深め、良かった事やAさんの良いところをもっと引き出していきたい。そして、『あれが良かったね～。コレ、良かった！』などのポジティブな部分にだけでなく、ネガティブな部分やもう少し検討が必要だった部分にもしっかりと目を向けていきたい。Aさん自身は、徐々に生活にも慣れはじめ、一緒に生活しているグループホームや生活介護事業所の方と良好な関係・信頼関係を築けてきている。今後も他部署やコンサルテーションなどを活用して、Aさんに関係している方と協力し、Aさんが快適に安心して笑顔で過ごせるようにみんなで協力していきたい。